

国立ハンセン病資料館  
2009年度企画展「隔離の百年～公立癩療養所の誕生」

第1回シンポジウム「隔離の記憶を掘り起こす」

～全生病院「患者地区」を囲んだ「堀・土塁」～

1909年に開設された全生病院には、「患者地区」を取り囲む大規模な「堀・土塁」(ほり・どるい)が築かれていました。

その理由は、全生病院創立時に医長として赴任、まもなく院長となった光田健輔(みつだけんすけ)によって、①患者の逃亡を防ぐため、②非伝染地区と伝染地区を厳重に分けるため、③外部からの襲撃に備えるため、と、後に説明されています。

療養所の「内」と「外」を分け隔てる境界に、なぜそのような大規模な「要害」(ようがい)が構築されなければならなかったのでしょうか。

ハンセン病資料館では、当時の貴重な写真や地図資料、証言記録を紹介しながら、療養所設立百年の節目の年に、改めて皆様と一緒に考えてみたいと思います。

日 時	9月27日(日) 13:30～16:30
会 場	本館映像ホール
挨 拶	成田 稔(本館館長)
問題提起・報告	黒尾和久(本館学芸課長)
シンポジウム	司会:稲葉上道(本館学芸員)/会場の皆様
	入場無料。先着 150 人まで。事前申込み不要です。



土塁を崩し、堀を埋める患者作業風景  
(白衣の人物は作業を監視する病院職員)



患者による開墾作業風景

問い合わせ 国立ハンセン病資料館 (042) 396-2909  
〒189-0002 東京都東村山市青葉町4-1-13